

第1回一橋大学関西アカデミア「人を創る、都市（まち）を創る——未来を拓く大阪——」
大阪からアジアに、そして世界に発信する一橋大学の新たな試みがスタート

熱い議論を戦わせた 230 名

第1回「一橋大学関西アカデミア」が、「人を創る、都市（まち）を創る——未来を拓く大阪——」をテーマに、2008年3月22日（土）13：30～16：30に、大阪科学技術センタービルで開催されました。

プログラムは、杉山武彦学長のあいさつを皮切りに、基調講演「グローバリゼーションとアジアの中の関西」（小川英治商学研究科教授）、シンポジウムと続きました。シンポジウムの司会は、山内弘隆商学研究科長。パネリストは、村山敦氏（関西国際空港代表取締役社長）、白石真澄氏（関西大学政策創造学部教授、規制改革会議委員）、小川英治教授（商学研究科）、小田切宏之教授（経済学研究科）、山下裕子准教授（商学研究科）の各先生方です。

参加者は、関係者を含めて約 230 名。大阪ばかりでなく、神戸や京都からも卒業生はじめ市民の方々が集まり、今後の展開に向けたアドバイスを含めて、さまざまな熱い思いのこもった意見をいただくことができました。

なぜ、関西アカデミアか？

一橋大学は創立 133 年を数え、その学問的蓄積を踏まえた学科編成を行ってきました。大学といえども内側に向いていればいいという時代ではありません。同窓会組織である如水会がフットワークよく社会に発信しているのと同様に、大学もより積極的に情報発信をしてかなければなりません。その一貫としてスタートしたのが、“一橋大学関西アカデミア”です。

なぜ、関西アカデミアか。それは、商工民の町としての歴史を育んできた大阪と、社会科学の総合大学である一橋大学がともに蓄積してきた「人と都市の開発理念」を俎上にのせることで、明日への智慧を創り出せるからです。一橋大学は伝統的に市民の学としての社会学を追究、都市で智慧を出しながら働く市民を意識してきました。その点では、大阪とも相通ずるところがあります。市民の学、商工民の学について、学び合い、ヒントが得られるなら互いにメリットがあります。アジアとの関係で大阪を考えることで、日本とアジア、さらには世界の未来へと架橋できるような理念を発信していこうとしているのです。大阪如水会の会員は 1000 人を越えていますし、近隣の支部も活発に活躍しています。こうした支部の応援を得ながら、情報発信を行っていくことで、関西、卒業生、大学の活性化に向けたシナジー効果も狙っているのです。

定点活動でプレゼンスを高める

関西アカデミアは、今後年3回程度の継続的な展開を考えており、10月に第2回目の開催を予定しています。それは、定点的な活動により、学問的な深みの追求ばかりでなく、関西圏でのプレゼンスの向上も狙っているからです。その点が、「移動講座」や「開放講座」との大きな違いといえます。

テーマによっては、受験生など若い世代向けのジュニア版の開催も考えられます。出張オープンキャンパスのようなスタイルです。なお、5月には対象を50～60名程度に絞った「Study Forum 1」を企画しました。中国から講師を招いて行う実践的なもので、こうしたフォーラムもアネックスとして併せて行っていく計画です。こうして、経済人や一般市民、若い人たちと対象の幅を広げていきます。

大学は、学問を蔵の奥に大事にしまっておくだけでは存在価値がありません。学問を触媒としたナマの人間関係のネットワーク化を支援するのも重要な機能です。一橋大学がこれまで蓄積してきた学問的成果を社会に還元するとともに、ノウハウの宝庫である卒業生たちに社会連絡の場を提供し、大学側も智恵を拝借する。関西アカデミアでの出会いからネットワークが生まれ、何かが新しく誕生することになれば、望外の幸せです。